

通 教 月 報

診 療 情 報 管 理 研 究

平成27年2月号

編 集

発 行 人

武田 隆久

〒102-8414 東京都千代田区三番町9-15

一般社団法人 日本病院会 通信教育課

TEL 03-5215-6647 (受講生専用)

FAX 03-5215-6648 (受講生専用)

URL <http://www.jha-e.com/>

受付時間

9:00~17:00  
(ただし、土・日・祝祭日、年末年始は除く)

発行日

毎月1日

定 価

1部 150円 1カ年1,600円(税込・送料込)

郵便振替

00190-5-396045

名 義

一般社団法人 日本病院会 通信教育部

## 身体の中に離れ島はない

浜家 一雄

岡山済生会総合病院 総合教育長

最近では画像診断の発達とともに剖検の機会は随分少なくなった。私は40年以上も病院病理医をしており、今までに自分で執刀した剖検例を調べてみたら、2014年12月現在で総計2343例あった。この数字には米国で病理医レジデント時代に経験した72例も加えている。1981年には154例の執刀をしており、朝から晩遅くまでほとんど剖検室にいたような日もあった。CTが発達する前は、脳出血か脳梗塞かの診断がつかないために脳卒中という病名がよく使われた。この言葉は診断名としてはほぼ死語になっているが、このような患者で、どちらか判断がつかないために剖検の依頼がよくあった。

多数の剖検例を経験する中で忘れられない症例がある。

77歳男性で左肺下葉の結節影があり、ブラッシングで小細胞癌と診断された。化学療法、予防的な全脳照射を行い、経過は良好であったが、1年半後に次第に全身衰弱をきたし、胸部レ線、画像上でも再発所見がなく、剖検でも肉眼的には諸臓器には再発所見はなく、老衰死と判断した。しかし組織学的には脳髄膜表面へのびまん性の小細胞癌転移があり、最終的には癌性髄膜炎と診断した。末期のカルテの記載を見直してみると主治医の記録では意識の混迷が記載されており、看護記録には頭痛、嘔吐など髄膜刺激症状の所見があった。呼吸器専門医も神経所見を見逃してはならないこと、さらにはがん細胞の「生へのしたたかさ」を思わせる症例であった。

病院病理医としての日常ではこのように特定臓器の専門医の盲点をついたような症例にしばしば遭遇する。脳も多くの臓器の中のひとつに過ぎない、との観点が私のモットーである。体の諸臓器は血管、神経、ホルモンなどでつながっているが、それぞれの臓器の専門医がいても、最近では全体を見渡すことの出来る医師が次第に少なくなりつつあることに不安を感じざるを得ない。「身体の中に離れ島はない」、「すべては陸続きである」というのは病院病理医40年の実感である。

今日は、職場の窓には真冬にしては珍しく暖かい日差しがさしている。春がやってくるのはまだ先のことなのに。

